

二〇二二年度

帰国生入試 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二三ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

由香は高校でダンスに打ち込んでいたが、事故に遭って耳に障がいを負い、ダンスができなくなってしまった。由香の彼氏である修一は、耳の聞こえない安忠成という人物に由香のことを相談してみたところ、手話を取り入れたダンスをするグループ「Blue Hands（ブルー・ハンズ）」のことを教えてもらう。ネットで「Blue Hands」の動画を見た修一は、翌日、学校を休んでいた由香を訪ね、由香の母親（裕子）に家に招き入れられた。

由香はリビングのソファに座って紅茶を飲んでいた。突然、裕子が修一と一緒に帰宅したことに驚いた。「え、どうしたの？ 二人一緒に。あれ、学校は？」

起き抜けの無防備な格好を修一に見られたことが恥ずかしかった。

『なんか話があるんだって』

裕子はメモに書いて由香に見せた。

三人はソファにいったん腰掛けた。すぐに裕子は「お店の準備あるから」と席を立ち、何事かと起きてきた悟は、修一を見ると小さくお辞儀をして「疲れたからもう少し寝るよ」と言い残り、自室へ戻った。気を利かせたのだろう。由香は父と母の二人に笑顔を向けた。そして修一に向き直った。

「なんか急な話？」

「急、ていうか…えっと……」

修一がリュックからiPadとノートを取り出した。

『見てもらいたい映像があるんだ』

「何？」

iPadから激しいビートが流れ始めた。由香にはそれがぼんやりと聞こえるだけだった。

「これ、Blue Handsっていうダンスグループ」

修一はノートに書きながら言った。

由香はそれがダンスの映像だとわかり、息を吐き、目を伏せた。

「今、そういうのいいや」

『わかるけど』

「わからないくせに」

由香は吐き捨てるように言った。

「今、見たくない」

由香は修一の無神経さに腹が立った。

踊れなくなった私にわざわざダンスの映像を見せに来るなんて、どうかしてる。

由香は修一から顔を背けた。

『ちょっとでいいから』

「ごめん、無理！」

「由香、頼むよ」

由香が立ち上がると、修一は回り込んでiPadをかざした。

「しつこいって」

由香はiPadをはね除けた。

「一回だけでいいから！」

由香は修一を睨んだ。修一がなるべく目を外さないようにしてメモを書いている。

『頼むから！』

殴り書きのメモを突き出してきた。

修一の口が『ゆ・か』と大きく動く。

修一のアマりに真剣な眼差しに由香は根負けした。そして、ため息混じりにiPadを乱暴に受け取った。ソファに座り直

し、画面にちらっと目を向けた。修一が改めて映像を再生させる。画面の中で Blue Hands が踊り出す。

3 「なんだこのグループ、全然知らない人たちなんですけど…」

『このあとくらいからのとこ』と、修一がメモを差し出した。

由香は仕方なく画面を見た。映像は Blue Hands が歌詞の一部を手話にアレンジして踊っているシーンだった。

男性五人グループか…。みんなやたらでかいし。

そのまま見ていると、メンバーが揃って踊るシーンから、カットがメンバーの一人のバストアップに切り替わった。指先の見かけない動きと振り付け全体から発するグルーブが一体となっていた。

…ん？…なんだこれ？

画面の中のダンサーはその手と指先と腕の動きをビートに乗せて、感情を表現しているようだった。

…なんか、伝えようとする動き…？

カットがリズムカルに次々と変わる。編集のセンスが抜群にいい。長いショットでは五人のバストアップになり、カメラは彼らの周囲をゆっくりと円形移動していった。カメラに向けてメンバーそれぞれが微妙に違う表情を見せた。振り付けは見事に揃っていた。

パントマイム的な部分もあるけど、それだけじゃないし、振り付けとも少し違った感じがする。なんでだろ…？ 音はよく聞こえないのに、音じゃないものが聞こえるような気がする…。

初めて見るタイプの振り付けに、由香は次第に惹き込まれていった。

『昨日、知り合った人が、教えてくれたんだ』

由香は頷いてそのまま映像を見ていた。

「これ…手話？」

『そう。だけど、だけでもない。なんか新しい、表現』

修一がメモに書いて見せた。由香は、じっと画面を見つめたままだった。Blue Hands は画面の中で踊り続けている。音ははっきりと聞こえない。その代わりに別のものを感じた。

4 「…面白いね」

由香は思わずポツリと反応した。そして、そのまま iPad の画面を見つめていた。

彼らの手と指の動きに集中して見ていると、時折、彼らの掌から柔らかな波動が感じられた。まるで蛍の淡い光をスローシャッターで捉えたようなイメージが、浮かび上がっては次々と消えていった。由香は自分には聞こえないはずの音が、直接胸に聞こえてくるような錯覚を覚えた。

なんだろう…この感覚。これも…手話…？

修一がそっと由香に合図をしてから、⁵ ゆっくりとした手話で話しかけてきた。

『やってみない？』

「え？」

『由香が、また、踊るのを、見たいんだよ、オレ』

由香は修一をじっと見つめた。

それから、Blue Hands の映像に再び目を落とした。画面を通して彼らの言葉が、こころの深いところに伝わってきたような感覚があった。

手話はわからないのに。なのに修一の自分への気持ちが沁みってくる。気がつくとも、iPad の両端を強く握っていた。唇が震えた。

6 「…また…踊れるかな？ 私」

『うん、きつと』

「…また踊れるのかな？ 私」

『うん、絶対に』

由香の目に涙が溢れた。ひと粒、もうひと粒、iPad の画面に落ちた。

7 「本当に、また踊れるのかな？」

顔を上げると、涙は頬を伝った。

由香が手話を始めることに抵抗があったのは、自らの身を、あちら側⁸に置く準備ができていないためだった。朝起きたら元通りに聞こえるようになっていないんじゃないかという儂い^{はかな}未練もあった。頭では遠い先に必要になるかもしれないと理解できていても、見えない未来を見据えて^{みす}実際に行動に移すことに踏ん切り^{きり}がつかなかった。

行動に移すことは、認めたことになる。

自分は、障がい者だと。

自分の中に潜む^{ひそ}偏見^{へんけん}が当事者になつていっているのにもかかわらず存在することに、由香は嫌悪感を覚え、自分を恥ずかしいとさえ思った。余計に手話に対してのハードルが上がった。真由や亜紀のように聞こえる人が習うのとは意味が違うのだ。彼女たちの自分を思ってくれる気持ちは痛いほど伝わっていた。しかし、彼女たちは手話が上達してもしなくても聴覚^{ちやうかく}を失うことはない。自分だけが大切な機能を欠いた不完全な存在なのだと、由香はいじけたような気持ちにすら、時々なつてしまっていた。

今までの自分をすべて捨てるなんてできない。

たった十七年だけ、それでも十七年分の想い^{おも}があった。何より、自分の世界がいつか変わってしまうことが怖かった。

修一も真由も亜紀も、今はそばにいてくれている。でもそれが永遠じゃないことを私は知っている。この先、ひとりで、あちら側⁸に取り残されるのが怖い。そうなったら、私はどちら側にも属せない孤独^{こどく}を抱えることになる。でも、あちら側⁸だけの景色は想像できない。自分の大切なものが何一つない世界で生きることの意味が見出せない。

でも……。

でも、もしダンスがあれば。

もう一度踊れるようになったら……。

由香は修一と手を繋いで渋谷^{しよや}の街を歩いていた。夜の八時を回った頃^{ころ}だ。宮益坂^{みやますが}を少し上がった先にあるクラブに、今夜

出演するBlue Handsを見に行くためだった。事前に修一が安忠成に相談した際、普通^{ふつう}に会うよりステージを見に来たほうが自然に会えるんじゃないかとの提案を受けた。由香も映像だけでなく、生で彼らを見てみたいと修一に言った。

事前にネット検索^{けんさく}すると、彼らの略歴を記したサイトを見つけた。

Blue Hands (ブルー・ハンズ) 神奈川県出身の男性五人によって二〇〇八年に結成されたヒップホップダンスグループ。メンバーはキー(リーダー)・シヨースケ・テツ・ツクネ・ヤマジ。二〇一二年、DJハルが参加した。洋楽・邦楽^{ほんがく}を問わず選曲し、その歌詞や楽曲のイメージを手話に意識し、振り付けに取り入れて、ダイナミックかつ繊細^{せんさい}に踊るステージが持ち味。全員が揃った時の手話ダンスは力強くメッセージ性がある。全員、健聴者^{けんちやうしや}である。

二〇〇八年結成か。割と最近のことなんだ……。メンバーみんな聞こえる人なのに、どうして手話やろうとか思ったんだらう？

そのサイトに張り付けられたリンクからBlue Handsのホームページに飛ぶと、彼らの活動履歴^{りれき}が詳しく書いてあった。だが、由香は事前情報のチェックは最低限にとどめ、生で見ることを楽しむことにした。

由香は事故に遭^あってから初めて来る渋谷だったので、どこか気持ちが落ち着かなかった。かつては自分たちの庭のように歩けた街が、すっかりよそよそしく感じられた。ハチ公前のスクランブル交差点を急ぎ足で渡りながら、由香は修一の手をぎゅつと握った。

由香には確かめてみたいことがあった。

東北^注から戻ってきてからののだが、夜、自分の部屋でベッドにもたれかかって両手を広げて掌をじっと見てみると、指先がほんのりと熱を帯びてチリチリとした感触を感じることもある。そしてそっと手を合わせると、淡い、とても淡い光のようなものが浮かび上がっては消えるのだ。もちろん、ただの錯覚かもしれない。

でもそれは……もしかしたら指先から発せられる私の言葉なんじゃないだろうか。口だけではなく、指先がこれからもう一

つの私の声となり、大切な人たちと言葉を交わすようになるのだろうか。これはその小さな前兆なのではないだろうか。聴覚を失くしたこと。何度考えても悲しくてやり切れない。けど、失くしてばかりの私ではいたくない。東北の海にぶつけてきた悲しみ。その悲しみを黙って受け止めてくれた海。私は生まれ変わりたい。新しく生まれ変わりたい。掌に感じた淡い光を掴んでみたい。私の背中を押してくれるさっかけが欲しい。そのためにも……。

由香は初めてBlue Handsの映像を見た時に感じた波動をライブで実際に体感したかった。しかし、あえてそのことを修一には言わずにいた。

(中略)

やがて、大きな歓声と拍手があり、通路からBlue Handsが現れた。五人はさほど広くはないステージに並び、その周囲を観客が取り巻いた。それぞれがポーズを取り、シルエットになった。それまでかかっていた音楽がフェードアウトした。DJが合図を送り、照明とシンクロしてリズムを強調したイントロに変わった。

スイッチを入れたように、Blue Handsがハウスのグルーブに合わせてダイナミックに踊り始めた。トラックが何層にもサンプリングされたサウンドは、彼らのセンスを感じさせた。ただ激しいリズムだけではないメロウで自然と心と身体が動いてしまう選曲だった。

やがて一瞬のブレイクがあり、ビートが分厚く激しくなった。メロディアスなラップが響き渡り、ダンスフロアが一気に熱くなる。ここでステージ上の彼らは振り付けに手話を織り交ぜながら、キレのいいステップとしなやかな身体全体の動きで観客の視線を一つに集めていた。何より腕と指の使い方が特徴的だった。

フロアに響く音楽は由香の好きなタイプのグルーブだった。

あれっ？ グルーヴ？ なんて感じるんだろう。

補聴器を通してというより、身体がフロアに響くグルーブを薄く感じとっていた。由香は嬉しくなって身体を振動に委ねた。

そのまま数曲が続いた。ステージ上の五人のテンションが上がり、観客もつられるようにして、空間全体に熱が生まれていく。

久しぶりのダンスフロアの空間に身体がようやく慣れた頃、じっと目を凝らしていると、メンバーの指先から放たれる柔らかな光の波動が、由香に感じられた。

あ…これ…。

もちろん、まだその言葉のすべてを読むことはできない。ただ、感じるだけだ。冬の窓辺の陽だまりのように、温かくじんわりと。

由香は感動していた。

そっか…この人たちの伝えているのは言葉じゃないんだ…。

言葉だ…。

だから、聞こえない人も、聞こえる人も同じ意味を感じるんだ。

12 由香はBlue Handsの踊る姿を身体でリズムを取りながら見つめていた。

(村本大志『透明な耳』)

⑩ 悟…由香の父親。

バストアップ…映像や写真で胸から上の部分を映すこと。

グルーブ…ポピュラー音楽の分野で、楽曲から感じられる心地よいリズム感をいう。

東北から戻ってきてからなのだが…本文より前の場面で、由香は一人で東北に行った。そして海に向かって、耳が聞こえなくなり生きているのがつらいという思いや、それでも自分は死にたくないし、踊りたいという思いを、力の限り叫んだ。

ハウス…ダンス・ミュージックの一分野。

メロウで…柔らかで。

〔設問〕

問一 ――線部1「由香はそれがダンスの映像だとわかり、息を吐き、目を伏せた」とあるが、この時の由香の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 修一がダンスの映像を見せてはげまそうとしてくれるのはありがたいが、その心づかいに素直に応じられなくて申し訳なく思っている。

イ ダンスの映像を目にしたことでダンス部員として活躍できた頃を思い出し、自信ややりがいを持った今の自分をふがいなく感じている。

ウ 音楽がよく聞き取れず、ダンスの映像を見ても心に響くものがないのに、わざわざそれを見せようとする修一の配慮のなさに失望している。

エ 事故のせいできなくなってしまったダンスに向き合うのはつらく、自分にはダンスの映像などとても見ることはできないと思っている。

問二 ――線部2「修一がなるべく目を外さないようにしてメモを書いている」とあるが、修一がこのようにしたのはなぜか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 修一は由香に耳が不自由な人のためのダンスグループについて知ってほしいと願っており、由香と見つめ合い自分を信じてもらえなければ、メモに何を書いても願いは伝わらないと思っていたから。

イ 修一は由香にもう一度ダンスへの情熱を取り戻してほしいと強く思っているのに由香が応じてくれないので、彼女をじっと見つめながら、自分の失望をどんな言葉で伝えようかと考えていたから。

ウ 修一は由香に障がいがあってもダンスができることを知ってほしいと望んでおり、もし由香から目を外したら、自分の望みを彼女が受け入れたかどうかが分からなくなってしまうと考えていたから。

エ 修一は由香に何かを感じさせるはずのダンスの映像をどうしても見ても見たいと思っており、今ここで由香から目をそらしてしまったら、彼女に自分の思いが伝わらなくなると感じていたから。

問三 ――線部3「なんだこのグループ、全然知らない人たちなんですけど……」とあるが、この時の由香の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア もとよりたいした期待はしていなかったが、見せられた映像がよりによって名も無いダンスグループのものであったため、しらけた気分になっている。

イ 修一の真剣な態度を見て、どのようなダンスを見せようとしているのか興味がわき心を動かされたが、無名のグループの映像で拍子抜けしている。

ウ まさか全く知らないグループの映像を見せられるとは予想しておらず、修一が自分よりダンスに詳しくなっていることに複雑な思いを抱いている。

エ 修一の必死な願いを断るのも悪い気がして動画を見たが、全く知らないダンスグループの映像にどう反応したらいいかわからず困惑している。

問四 ――線部4「…面白いね」とあるが、由香がこのようにつぶやいたのはなぜか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 修一が見せてくれたダンスの映像は、障がいをこえてメンバーの声が由香の耳に届くものになっており、由香にコミュニケーションの不思議さを感じさせるものであったから。

イ 修一が見せてくれたダンスの映像は、ダンスの中に自然なかたちで手話を取り込まれており、自分も手話を学んでみたいという気持ちを由香に抱かせるものであったから。

ウ 修一が見せてくれたダンスの映像は、由香がこれまで見たことのないダンスであり、手話を通じて何かが伝わってくるような感覚を由香に覚えさせるものであったから。

エ 修一が見せてくれたダンスの映像は、柔らかな波動の力によって由香の気持ちをやわらげ、周囲に反発することも多い由香に人のやさしさを実感させるものであったから。

問五 ——線部5「ゆっくりとした手話で話しかけてきた」とあるが、ここで修一が「手話で話しかけ」たのはなぜだと考えられるか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ブルー・ハンズのダンスに心ひかれて今由香なら、自分も手話をやっていることを見せれば、手話を覚える気になるのではないかと期待したから。

イ 手話のハードルは高いことを自ら示し、由香にもブルー・ハンズのような手話を使ったダンスができるようになるという希望をあたえたかったから。

ウ ブルー・ハンズのように由香に踊ってもらいたいという大切な気持ちは、たとえ下手できちんと通じなくても、手話で言葉にするべきだと思ったから。

エ メモを使うよりもブルー・ハンズのように自分の指を使ったほうが、手話がわからない由香であっても、その心へ思いが届くのではないかと思ったから。

問六 ——線部6「…また…踊れるかな? 私」から——線部7「本当に、また踊れるのかな?」にかけて由香の発言には少しずつ変化が見られる。由香の発言がこのように変化したのはなぜか。六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

問七 ——線部8「私はどちら側にも属せない孤独を抱えることになる」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 耳が聞こえていた時と同じような生活はもうできなくなるかもしれないと理解しつつも、一方で自分が大事にしてきたものを捨て去って生きる決心もできず、その間で一人で悩み続けなければならないということ。

イ これからは友人たちと違う世界で生きなければならないのだが、まだ耳が聞こえるようになる希望がある中で新しい世界に進む覚悟も持てず、前にも進めず過去にも戻れない宙ぶりの状態になってしまうということ。

ウ 耳が聞こえなくなった生活を考えなければならぬという現実を受け入れているが、それは今までの十七年間の人生を否定することを意味するので、この先ずっと心のどこかで寂しさを抱き続けるだろうということ。

エ 今は分けへだてなく接してくれる大切な友人がいるが、きつとこの先自分だけが耳が聞こえないまま人生を歩むことになってしまうので、取り残されてしまったような孤独感を味わうようになるだろうということ。

問八 ——線部9「由香は修一の手をぎゅっと握った」とあるが、この時の由香の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 音が聞こえなくなった自分にとって、渋谷は再び事故に遭う危険にあふれており、怖くて修一にすがりついている。

イ 慣れ親しんだ渋谷の音が聞こえない自分は健聴者でないことを実感し、修一と新たな一歩を踏み出す決心をしている。

ウ かつてのように音の聞こえない渋谷が、まるで別世界のように感じられて心細く、修一だけを頼りに感じている。

エ 音の聞こえない渋谷で、自分の手を引いてくれる修一への信頼と感謝を、掌と指先の熱を通して伝えようとしている。

問九 ——線部10「掌に感じた淡い光を掴んでみたい」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものをつ選び、記号で答えなさい。

ア 大切なものを失くしてばかりいると思って絶望していたが、今後は身の周りのささいな幸せも手にできるように、前向きな考え方をしていきたいということ。

イ 自分の悲しみを正確に理解できる人はいないとあきらめていたが、自分の思いを伝える方法を掴みかけたことで、ほんの小さな希望を抱き始めたということ。

ウ これまでは失意の底にあったが、何度か指先で感じ取った明るい未来への予感を、ほんやりとしたものから現実のものとする手がかりが欲しいということ。

エ 自分はもう決して変わることができないと思っていたが、方法こそ明確でないものの、新しい自分に生まれ変わる展望が開けたかもしれないということ。

問十 ——線部11「由香は嬉しくなって」とあるが、なぜ嬉しいのか。次の中から最も適当なものをつ選び、記号で答えなさい。

ア もう感じ取れないものとあきらめていた音楽の響きを、聴覚を失ったはずの自分の身体が感じ取っていたから。

イ 補聴器を通さなくても音楽が感じ取れるようになっており、これから自分の聴覚が回復することを予感したから。

ウ 聴覚に障がいがあっても、手話の助けがあれば、身体に伝わる振動を音楽として感じ取れることがわかったから。

エ 自分の身体で久しぶりに感じ取ることのできた音楽が、偶然好きなタイプの音楽であったことに気づいたから。

問十一 ——線部12「由香はBlue Handsの踊る姿を身体でリズムを取りながら見つめていた」とあるが、この時の由香の気持ちにはどのようなものか。次の中から最も適当なものをつ選び、記号で答えなさい。

ア 音が聞こえても聞こえなくても、誰もが同じように意味を感じる手話ダンスの力を目の当たりにし、聴覚を失う前よりも素敵なダンスが踊れる自分に生まれ変わるかもしれないという明るい予感をブルー・ハンズの姿に感じている。

イ 耳の聞こえる人にも聞こえない人にも同じ意味が伝わる手話を、言葉や歌詞の代わりに用いた新しいダンスに胸を打たれて、自分もこんなふうに踊ってみたいという思いが心の底からあふれ出し、ダンスへの情熱を取り戻している。

ウ 音が聞こえるかどうかに関係なく、表現にこめられた思いは人の胸に等しく届くことを実感して、音が聞こえなくても自分はまたダンスができるだろうし、皆と心を通わせることもできるかもしれないという希望を胸に宿している。

エ ダンスは言葉を伝えるためのものではないため、耳の聞こえない人も聞こえる人と同じダンスが踊れるし、感動を届けることもできると知り、もう一度自分はダンスの世界に戻れるに違いないという期待と喜びを全身で感じている。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

そもそもハロウィンとはどんな祭りなのでしょう。それを知ると、渋谷のハロウィンとネットの関係がよく見えてきます。ハロウィンはアメリカで始まった子どもが主役の行事でした。日本でもかつては主に幼稚園などで開かれる子どものための催しでした。大勢の大人が参加するようになったのは、ここ一〇年ほどのことです。

¹本場アメリカのハロウィンでは、魔女や怪物などに扮した子どもたちが近所の家々をまわり、お菓子をもらって歩くそうです。その仮装だけが日本に入ってきて、最近のハロウィンパレードになったわけです。もともとは、子どもたちが近所の家々を訪ね歩くのがメインの行事ですから、そこには近所づきあいがあるコミュニティが地域に存在していなければならぬ。地元住民の共同体があつてこそのお祭りなのです。

ハロウィンときいたときに、まっさきに思い浮かべるのは、²私が子どものころに体験したある祭りの風景です。それはハロウィンとはまったく似つかない静かで情緒あふれる祭りでした。

場所は福岡市の箱崎町、時代は昭和三〇年代、七月の夏休みが始まったばかりのある日のことです。

夕暮れごろ、洗い立ての浴衣を着た子どもたちが集まってきました。下駄をカランコロンといわせながら、手には線香の入った袋を携えて、近所の家を回り始めます。家の暗い庭先には陶器や石でできた大きな器が一つ置かれていて、その中でろうそくの火がポツと明かりを灯していた。近づいてみると、敷きつめられたベージュ色の砂の上にミニチュアの素焼きの人形、水車小屋、イノシシやクマなどが配置された箱庭がつくられている。その隅には、先にお参りにきた子どもたちが残っていた線香からの残り香が漂う。家の奥に向かってみんなで「こんばんは」と声をかけると、やおらおばあさんが顔をだして、あめ玉をくれるのです。

こうして近所の箱庭のある家々を回っていくのですが、子どもが主役であり、地域の家々をまわってお菓子をもらおうというこのスタイルは、まさに元祖ハロウィンとそっくりです。仮装はしませんが、新しい浴衣というハレの装束を身にまとい

3

私の記憶の隅にあるこの行事は、当時すでに衰退し消えていく直前だったようです。私も二、三度、参加したのですが、今ではもうその行事の存在を覚えている人も少なくなりました。当時、その町では新住人だった私の家は、箱庭を出すことはありませんでした。新しい住人が増えて、このささやかな祭りを伝承する家が少なくなり、自然にとだえてしまったのでしょうか。コミュニティのつながりが崩れていくとともに、昔から伝わる小さな地域だけの祭りは支えを失い消滅したのです。

伝統的な祭りは、地域のつながりがなくなれば消滅します。そうしてなくなった古い祭りは全国に無数にあります。その反対に、地域のつながりがなくなっても、大きく発展した祭りもあります。イベント化、商業化した祭りです。そして渋谷のハロウィンのようにネット時代に「発生」し、急速に大きくなった祭りもあります。

伝統的な祭りと違って、日本のハロウィンは地域のつながりとは無縁な新しいタイプの祭りです。渋谷のハロウィンをつくりだしたのは、渋谷に従来から存在する既存のコミュニティではありません。そこに人々をキュウインし群れとしたのは、スマホのネット機能なのです。ハロウィンで渋谷にやってくる人々は、フェイスブックやツイッターといったSNSで連絡を取り合い各地から集合します。スマホの「#(ハッシュタグ)渋谷」「#ハロウィン」で検索して、祭りの様子を確認したりもします。主催者も会場の公式な設定もない祭りですから、スマホがなければ始まらないのです。

ではなぜ、これまでの祭りの主体となったリアルな人と人とのつながりが、今はなくなってしまったのでしょうか。まずなにより、隣近所との付き合いを中心とする「地縁」が薄れました。家族親族との「血縁」も以前ほどの強い結びつきはありません。職場でも非正規雇用が増え、終身雇用が絶対的なものではなくなりました。このように雇用の流動性が高まっている中では、「会社縁」というものもほとんど感じられない。そうした人と人とのつながりを実感しにくい社会に、現在の私たちは暮らしています。

地縁、血縁が生きていた時代には、地域に密着した盆踊りなどの祭りが、各地で催されていました。大家族主義をうたう企業などは、自ら盆踊りや運動会を催したところもあつたほどです。しかし、地域の結びつきが薄れていったとき、地方の経済的疲弊や過疎化があいまって旧来の祭りはしだいに姿を消していきました。

そして入れ替わるように拡大していったのが、都市型のイベント化した祭りです。たとえば東京だけでも、浅草の三社祭

といった旧来の祭りとは別に、高円寺の「阿波おどり」、原宿の「スーパーよさこい」、浅草の「サンバカーニバル」、品川、世田谷などの「ねぶた」と、さまざまな祭りがゴトウチから移植されて、毎年多くの人を集めています。動員数は数十万から一〇〇万人を超えるものまであり、みんな大規模になっています。

これは全国の都市に波及^{はきゅう}しています。「よさこい」「ねぶた・ねぶた」などは、全国各地に飛び火^ひしていて、地域を代表するイベントになったところもあります。これら都市型の祭りは人々の縁^{ゆかり}が薄^{うす}れていった地域で、その空白^{くわい}を埋めるように発展していきました。⁴ 花火大会、花見、また野外の大がかりなロックフェスティバルなどのイベントも、広義には現代的な祭りの一つといえます。

こうした祭りには運営する組織があり、計画にしたがって準備され、当日も時間^cタインイのスケジュールで祭りが^dカンリされます。それと比較^{ひかく}して渋谷のハロウィンにはプログラムもなければ、事前にどのくらいの規模になるのかさえ分かりません。この違いは大きい。というのもハロウィンのように自然発生的に始まり、数時間で終わってしまうような大きな祭りは、これまでなかったからです。⁵ ハロウィンはネット時代が生み出した二一世紀的な「群れ」の現象なのです。

ハロウィンに大勢の若者が集まってくるのは参加の手軽さと、もう一つは衣装やメイクを自己表現として楽しめるからです。

コスプレを楽しむという行動は、実はTDL（東京ディズニーランド）やUSJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）で、以前から始まっています。この場合、入場者の目的は、アトラクションを利用して楽しむことよりも仮装して園内を練り歩くことにあります。ハロウィン・イベントの期間中は入場者数も増加しました。

USJではこのほかにもホラー・ナイトという夜のイベントを設けていて、ゾンビなどの衣装やメイクを凝らした若者が数千人も詰めかけるといふことで有名になりました。

一見すると奇抜^{きぼつ}な仮装は強烈な自己主張^{きようちう}にみえます。しかし本当のところどうなのでしょう。それは日本代表のサッカーの試合で、観客が顔にフェイスペインティングしたり、映画「スター・ウォーズ」のオープニング上映会でダース・ベイダーのマスクをかぶったりすることと同じで、実は個人を隠^{かく}す個性殺^{こせうころ}しです。⁶ 記号としての^{ふんごう}扮装^{はんさう}を行うことで、自己の固

有名詞^{おなじことば}を覆^{おほ}い隠^{かく}してしまう。だからこそ、感情を爆発^{ばくはつ}させたり、はじけたりできる。個を捨てることで群衆との一体感を得ることができるといふわけです。

スポーツ観戦での応援^{おうえん}、コンサート会場での観客も群れのなかで「もまれる心地よさ」を味わえます。⁷

現代の祭りにおける仮装とは、それを楽しむためにあるというより、自分を隠してふだんできない感情爆発の時間を手に入れると同時に、群れとの一体感を得るためにもいえます。

時を太古まで遡^{さかのぼ}れば、人類が世界に拡散し文明を築けたのは、大きな群れを作ったからだといわれています。群れをつくることは狩猟^{しゅりやう}にも、農耕にとつても合理的であり、多くの収穫物^{しゆわくぶつ}を手に入れるもつとも有効な方法でした。他の捕食動物とのキョウソウ^{きょうそう}に打ち勝つたのも、群れがあったからです。力の弱い人類にとっては、できるだけ大きな群れをつくること、他の集団に勝つ方法でもありました。

私たちの内面には過去の歴史時間によって組みこまれた群れへの依存性^{いそんせい}が、今も色濃^{いろこ}く根づいているのかもしれない。近代社会は一個人という観念を人に植えつけました。しかし個々人に宿^{あが}っている「群れること」への憧^{あこが}れまで捨てることはありませんでした。⁸ 渋谷の群衆^{ぐんしゆ}が発するエネルギーの源は、そうした太古の記憶にあるのでしょうか。

（藤原智美『スマホ断食 コロナ禍のネットの功罪』）

⑧ ハレの装束：普段とは違う、行事の際の特別な服装のこと。

「設問」

問一 〰〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「本場アメリカのハロウィン」、——線部 2「私が子どものころに体験したある祭り」とあるが、この二つの祭りにはどのような共通点があるか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア どちらも子どもたちが中心になっており、地域に住む人同士の普段からの交流によって支えられている祭りである。
イ どちらも子どもたちが仮装をして普段とは違う姿や格好になり、自分の住む地域の家々を歩いてまわる祭りである。
ウ どちらも子どもたちが主役であり、大勢で地域の家々をまわりながらお菓子をもらって歩くにぎやかな祭りである。
エ どちらも子どもたちが自分で特別な衣装を準備したり、人形を手作りするなど子供に工夫が求められる祭りである。

問三 ——線部 3「私の記憶の隅にあるこの行事は、当時すでに衰退し消えていく直前だったようです」とあるが、なぜ「衰退し」たのだと考えられるか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア リアルな人の結びつきがスマホの登場によって失われ、伝統的な祭りの基盤となるコミュニティのつながりが崩れてしまったから。

イ 地縁や血縁といった地域住民の結びつきが弱くなるにしたがって、伝統的な風習が共同体の中で受け継がれなくなっていたから。

ウ 地域の子どもが減少するのともなって、子どもを主役とする伝統行事は必要とされなくなり、自然と忘れ去られてしまったから。

エ 伝統的な祭りを支える地域同士のつながりの消失と、商業化した祭りの発展により、地域の祭りに参加する人が少なくなったから。

問四 ——線部 4「花火大会、花見、また野外の大きかりなロックフェスティバルなどのイベントも、広義には現代的な祭りの一つといえます」とあるが、どのような点が「現代的な祭り」といえるのか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全国の都市に波及しており、地域の催しとして売り出すことはないのにも関わらず、多くの客を動員する点。

イ ある地域に特有だった伝統的な行事が、別の地域にも採り入れられ、人々の間に新たな縁を生み出している点。

ウ その場限りの一体感を得るために、見ず知らずの人々が各地から自^{おの}ずと集まり、大規模なものとなっている点。

エ 地元由来のものではなく、地域を問わず多くの人々が集まる催しとして企画され、盛大に開かれる点。

問五 ——線部 5「ハロウィンはネット時代が生み出した二一世紀的な『群れ』の現象なのです」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 渋谷のハロウィンは、誰が主催するわけでもなく、ネットを介^かしてつながった多くの人々がそれぞれ自由に集まってくることで発生したものだということ。

イ 地域の祭りであったハロウィンは、スマホの登場により、若者の集団が自分勝手にふるまうだけの、無計画で祭りとは呼べないものになったということ。

ウ 運営する組織もプログラムもない渋谷のハロウィンは、スマホがなければ事前に規模や詳細^{しよつぎ}を知ることのできない、ネットに支えられた祭りだということ。

エ 渋谷のハロウィンは、人々がネット上ではなく直接会って集まることを目的としており、祭りのように細かな計画は必要なく短時間で終わるということ。

問六 ——線部6「記号としての扮装を行うことで、自己の固有名詞を覆い隠してしまう」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仮装して本来の自分自身ではない姿に変わること、日常の自分とは別の人間になろうとしているということ。
- イ 仮装して個性的な格好になることで、自分が平凡な人間であることを見破られないようにしているということ。
- ウ 仮装してその場の雰囲気と同化することで、集団の中であるべくおとなしくふるまおうとしているということ。
- エ 仮装して自分とは異なるものになることで、自分が何者なのかを周りに知られないようにしているということ。

問七 ——線部7「群れのなかで『もまれる心地よさ』を味わえます」とあるが、それはどのような感覚か。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々が一つの場に集まって、押し合いへし合いしている中に身を投じることによって、一人ではなく集団で行動しているかのような感覚になり、大きな力を得た気分を味わうことができるということ。
- イ 多くの人がひしめき合って、同じものを見て共に盛り上がる場として身置くことによって、人とつながることができ、まるで守ってもらえているかのような安心感を得られるということ。
- ウ 集まった目的が似た人や、場の雰囲気を共有している人々の集団の中にとけ込むことによって、いつもと違って熱狂することができたり、皆が一丸となっている感覚を得られたりすること。
- エ 目標を同じくする人の集まりの中で、なるべく周りに合わせて行動することによって、かえって普段隠している自分を表に出すことができ、群衆の中で自己主張できる充実感が味わえるということ。

問八 ——線部8「渋谷の群衆が発するエネルギーの源は、そうした太古の記憶にあるのでしょうか」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 渋谷のハロウィンに参加した群衆が群れになることへ情熱を傾けるのは、群れの中に身を置いて自分を忘れてしまいたいという太古より続く習性に身を任せているからだということ。
- イ 渋谷のハロウィンに参加した群衆が興奮した姿を見せるのは、過去の歴史の中で群れとなつてなにかを成し遂げた時の経験が、人々の無意識の中に刻まれているからだということ。
- ウ 渋谷のハロウィンに参加した群衆が感情を爆発させるのは、はるか昔に人類が群れとなって自分より強い動物たちと戦い、勝利を収めてきた記憶が呼び覚まされるからだということ。
- エ 渋谷のハロウィンに参加した群衆がすぐ一つの群れになるのは、古代以来群れに依存して狩猟や農耕を行い、文明を作り上げてきた生活が、現代でも継続しているからだということ。

問九 次に示すのは本文を読んだ生徒たちの会話である。空らんにはまる内容を答えなさい。なお、書く際には後の語群に示す二つの言葉を用いること。

A ネットと祭りと聞くと、いわゆるネット上での「炎上騒動」のことを思い出さない？

B そうだね。誰かが起こした不祥事などをネタにして電子掲示板やSNSが爆発的に盛り上がり、当事者に対する多くの誹謗中傷が飛び交ったり、制裁と称して個人情報特定し、さらし上げたりするような「炎上騒動」が起こることを、ネット上で「祭り」と言うことがあるね。

A 思っただけで、それって渋谷のハロウィンに若者が集まって熱狂するのと似ている部分があるんじゃないかな？

B なるほど。たしかに、筆者が本文で述べているいくつかの内容から、そういった「炎上騒動」に参加する人たちの行動も説明できる気がする。

A 「炎上騒動」に参加する人たちは ている
と考えることができそうだね。

B そうだとすると、渋谷のハロウィンと「炎上騒動」とは、どちらも同じネット時代の新しいタイプの「祭り」だと言えるのかもしれない。ただ、その熱狂が「炎上騒動」のように、人を傷つける方向にいつてしまわないよう僕たちは注意する必要があると思うよ。

〔語群〕 不祥事 ・ 攻撃

二〇二二年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

	解答用紙2
--	-------

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

—

問一

問二

問三

問四

問五

問 六			
80	60		

問七

問八

問九

問十

問十一

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
e	b
	c

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七

問 八

問 九		
「炎上騒動」に参加する人たちは		
ていると考えることができそうだな。		

二〇二二年度 帰国生入試 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

①
②
③
④
⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

解答用紙2

合計

問一
エ

問二
エ

問三
ア

問四
ウ

問五
エ

問六			
の	か	ら	修
あ	も	め	一
る	し	マ	が
も	れ	い	何
の	な	た	度
に	い	ダ	も
感	と	ン	勇
じ	い	ス	気
ら	う	が	づ
れ	思	も	け
る	い	レ	マ
よ	が	か	く
う	、	し	れ
に	少	た	た
な	し	ら	こ
っ	ず	ま	と
た	っ	ね	で
か	可	で	、
ら	能	き	あ
。	性	る	き

問七
ア

問八
ウ

問九
ウ

問十
ア

問十一
ウ

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
管理	吸引
e	b
競争	当地
	c
	単位

問二
ア

問三
イ

問四
エ

問五
ア

問六
エ

問七
ウ

問八
イ

問 九
<p>「炎上騒動」に参加する人たちは ネット上では自分が隠れているので、不祥事を許せない感情を爆発させ、大勢で寄ったたかかって当事者を攻撃することによって一体感を得 ていると考えることができようだね。</p>